

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ご列席のご家族、ご関係の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。あわせて、お忙しい中をご臨席賜りました来賓の皆様にも厚くお礼申し上げます。

今年は冬の寒さがことのほか厳しく、学内の桜の開花も遅れ気味になりました。皆さんのご入学をお迎えするまでは咲いていようと頑張ってくれたようで、今日でもまだ十分美しく咲き残っている状態です。新入生の皆さんはオリエンテーションの期間に学内の桜をご覧になったことと思いますが、ご家族の皆様も、お時間が許すようでしたら大学内に足をお運びいただいて、美しい桜と、あわせて自然豊かなキャンパスの様子などをご覧いただければ幸いと存じます。

さて、今年の創立記念日、10月18日に、相模女子大学は学園として創立125周年を迎えます。皆さんはその記念すべき125周年の入学生ですので、二重の意味で喜ばしい入学式となります。

ごく簡単に振り返ってみますと、125年前の西暦1900年に、本学の創立者である西澤之助が、当時の東京市本郷区龍岡町、現在の東京都文京区湯島に日本女学校を創立したのが本学園の始まりとなります。続いて西澤之介は1909年に帝國女子専門学校を設立しました。当時は女子大学の設立は認められておらず、女子の最高の教育機関は専門学校でしたが、帝國女子専門学校は日本全国で4番目に設立された女子専門学校です。しかし太平洋戦争末期の1945年4月に空襲で校舎が全焼し、翌年に相模原の現在の地に移転して、1949年には相模女子大学として新たな一歩を踏み出すことになりました。

ひと口に125周年と言いましても、非常に長い時間です。その間に戦争があり、終戦後には新憲法が制定され、社会のあり方も根本的に変化しました。最初に日本女学校や帝國女子専門学校が設立されたころは、女子は男子と同等の高等教育を受けることができない状況にあり、西澤之介もそうした不平等な状況をふまえて女子の高等教育を行う学校の設立を志したのでした。戦後、形の上では男女平等が当然のこととされるようになって久しいのですが、実際には、少し前にしばしば話題になったジェンダー・ギャップの問題など、今なお女性の社会での活躍や自己実現を阻む要素が根強く残存していることがしばしば指摘されています。今後、男女が真に対等の立場で協働するとともに、女性一人一人の志向に応じた多様な自己実現が可能な社会に向かっていくことが必要であると考えます。そのために、女性自らが、しっかりした力を身に着けることが大事であることは言うまでもありません。皆さんのこれからの在学期間は、そのための重要な期間であると思います。

自己実現の力を身につけるためには、まず自分が何を求めているかを知らなければなりませんが、これは意外に自分ではなかなかわからない、あるいはわかりきらないものです。皆さんは現在の関心に従って学科を選び、入学されたと思います。その関心をまず追求して深めていくこと

が、皆さんがすべき第一の事柄だと思います。その過程で新たな展開のヒントが生まれてくることもあるはずです。それと同時に、専門外のことに関心を持ち、幅を広げていくことも心がけてほしいと思います。これまで少し興味があるけれども触れてこなかったことがあれば、ぜひ本を読む、サイトを調べてみるなど、その分野に積極的に触れてみてください。知的な好奇心を常に抱いていれば、おのずと自分の世界が広がっていくはずです。それがこれまでの関心を深めるとと、縦糸と横糸のように組み合わせられていけば、隠れていた自分の関心が見つかり、豊かな自己実現の方向性が見えてくるように思います。

もう一つは、自分の関心や行なっていることを、少し広い視野から見直してみることです。私はここ2年ほど、主として大学生を対象とした、映像による短い番組制作のコンテストの審査員を担当しています。フィクションでもノンフィクションでもよいのですが、応募された作品は総じて技術的なレベルが高く、それなりに見ごたえのある作品が多いです。ただ、だんだん気になりだしたこともあります。

フィクションのなかで、ホラーのような作品がかなり多いのは、コンテストに応募する人たちが実際にそうした映画や映像に触れる機会が多いからかもしれませんが、見る人を怖がらせるテクニクは概してかなりの水準に達しています。ただ、そこに登場するたとえば殺人者のような恐怖の対象が、多くはひたすら理不尽に私たちに襲ってくる存在であり、コミュニケーションが絶対に成立しない相手として描かれていることに、何がしかの違和感を覚えずにはられません。これは、少数者を問答無用で排除する論理にどこかで通じているように思われるからです。逆に、仲間の連帯を強調した作品にも、それと通じるものを感じることがあります。仲間最優先の姿勢は、仲間以外の存在の排除と容易につながるからです。

面白い番組を作ろう、見る人を楽しませよう（ホラーならば怖がらせよう）という点に腐心しすぎるあまり、その作品が意図せずはらんでしまう問題点を見逃しているのではないのでしょうか。もう少し一般的に言い直せば、少し引いた視点から客観的に自分のあり方や言動を見つめてみる姿勢が、社会の中の自己実現には必要になってくるはずです。たとえ意図していなくても、自己実現のために他者を排除することは避けなければなりません。

ぜひこれからの在学期間、こうしたことを考えるよう心がけてほしいと思います。それが将来、皆さんのより充実した自己実現を達成する基礎となってくれると思います。

短期大学部入学生の皆さんに一言申し上げます。相模女子大学短期大学部は、1951年に開設以来、70年間以上にわたって、社会に優秀な卒業生を送り出してきました。一方、近年では、短期大学部の学科を順次4年制大学に移していくことを行ってまいりました。その最後の一学科として、食物栄養学科の教育内容を来年度大学に開設予定の地域クリエーション学科に発展的に吸収し、短期大学部は来年度から新規の学生募集を停止することといたしました。すなわち、皆さんは短期大学部最後の入学生ということになります。不安を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、言うまでもなく、皆さんが卒業するまで短期大学部の組織を堅持し、これまでと同様の教育を最後まで責任をもって行なってまいります。どうか安心して卒業まで学業や課外活動に励み、

充実した短大生活を送っていただきたいと思います。何か心配なことや気にかかることがありましたら、いつでも遠慮なく先生方や職員にご相談ください。

栄養科学研究科に入学された皆さんにも一言申し上げます。創立 125 周年というお話をしましたが、この間、栄養に対する一般の知識や関心も、非常に大きく変わりました。少子高齢化の社会になり、「人生 100 年時代」とまで言われる現代において、QOL の維持に関わる栄養学への期待はたいへん大きなものがあります。もちろん学問は実益に資する面だけでなく、真理追求という自律的な目的を持つことは言うまでもありませんが、どうかさまざまな困難にめげず、優れた研究成果をあげられることを願っております。

社会起業研究科の新入生の皆さんにも一言申し上げます。小説やマンガ、映画のようなフィクションの世界には、しばしば現実世界で私たちが漠然と感じている不安や願望が反映されています。かつて SF の世界でよく描かれたマッド・サイエンティストのような存在には、自然科学の急激な発達が人間の制御不可能なものになるのではないかという漠然とした恐れのようなものが反映していたと思いますし、映画『ターミネーター』に登場する未来社会のスカイネットが支配するディストピアなどは、AI と情報化の急激な進化がやはり人間の制御能力を超えて展開していくことに対する恐怖心が具象化されたもののように思われます。漠然とした恐怖心は、逆に地に足のついた具体的な取り組みによってしか解消されないと思います。一見混沌とした社会の不安を一気に一掃するような方法は存在せず、現実の課題について一つずつ丹念に取り組んでいくことが重要です。この点で、社会起業研究科に入学された皆さんは、実社会をフィールドにして、直接に具体的な課題にコミットする方法をこれから学ばれると思います。たとえ一人一人が行なうことは社会の一隅を照らすことであっても、それがやがては社会をよりよい方向に導く大きな力になっていくはずです。どうかしっかりと研鑽に励んでいただきたいと思います。

以上をもちまして、新入生を迎えることばといたします。あらためまして、ご入学まことに改めてとうございます。